

「男子、厨房にて」

—二稿—

2026/1/29

〈人物表〉

生原 想 いくはら そう
生原京子 いくはら きょうこ

中学三年生

想の母・シングルマザー

森田 洸平 もりた こうへい

想のクラスメート

福田 壮平 ふくだ そうへい

想のクラスの担任

1. 想の自宅マンション・リビングキッチン（夜）

生原想（14）、キッチンで弁当箱を洗っている。
水を止め、弁当箱を水切りかごに立てかける。

オフィスカジュアルな装いの母・生原京子（41）
がレジ袋片手にキッチンに駆け込んできて、

京子 「想ちゃんごめん遅くなった」

想 「あ、うん。お疲れ様」

京子、ふと洗ってある弁当箱を見て、

京子 「お弁当、どうだった」

想、屈託のない笑顔で、

想 「うん、美味しかったよ」

京子 「よかった。すぐ作るね」

と、冷蔵庫を開け、手際よく中身を取り出ししていく。
想、背後から冷蔵庫の中をじっと見ている。

2. 想の自宅マンション・想の部屋（朝）

アラームの音。目を覚ました想、ピピッと二つ音が
鳴ったところで、急いで止める。

眠そうな顔で、軽く深呼吸。

3. 想の自宅マンション・京子の部屋（朝）

ぐっすり寝ている京子。想、起こさないように慎重
に、枕元の目覚まし時計を止める。

4. 想の自宅マンション・リビングキッチン（朝）

寝巻き姿の京子、焦った様子でキッチンに入るなり、

京子 「ごめん寝坊しちゃった」

コンロの上には卵焼き用フライパン。

想、スマホのレシピ片手に卵焼きと格闘している。

想 「あ、おはよう。目覚まし止めといた」

京子、想の様子を見て驚く。少し考え込んで、

京子 「……今日ってなんかあったっけ」

想 「これからは俺が作るうかなくて。母さん忙しそうだし」
と、屈託のない笑顔を向ける。

京子、驚く。

京子 「何、急に」

想 「急に、思ったんだよ」

京子、考え込む。

京子 「……本当？」

想 「本当だって。これから朝ちよっとゆっくりして」

京子 「まあ、そう言うなら……」

5. 丸バツ中学・三年一組の教室（昼）

想、卵焼きに筑前煮、ほうれん草の和物の弁当。

隣の席の森田洸平（14）、少し貰って食べている。

想 「どう？」

洸平 「……美味しい。想ちゃん、才能あんじゃね？」

想 「だろ？」

洸平 「すごいって。店出せるわ」

想 「大袈裟」

6. 京子の職場・休憩室（昼）

京子、広げた弁当を見て、笑みを浮かべる。

同僚、弁当を見て足を止め、

同僚 「あらどうしたの」

京子 「え？」

同僚 「可愛いお弁当」

京子 「子供が作ったんです。これから毎日作るとか言ってる」

同僚 「ホントに？ 私のも作って欲しいわ」

京子 「まあ、いつまで続くか分からないですけど……」

7. 想の自宅マンション・リビングキッチン（夜）

食卓の上には絵に描いたような焼き魚定食。

京子 「……いただきます」

想 「召し上がれ」

京子、困惑しつつ箸を進める。

京子 「……美味しい」

想 「そう？ もう少し臭み取っても良かったかなあ」

京子 「え、なに。彼女でも出来た？」
想 「は？」

京子 「いや、急にどうしたのかなと思って」

想 「母さん帰り遅いし、ご飯あった方が嬉しくない？」

京子 「そりゃ助かるけどさ」

想 「ならワインワインじゃん」

京子 「想ちゃんは何がワインなの？」

想 「ん？」

と、答えに詰まる。

想 「母さんが、楽でまんじゃん？」

8. 丸バツ中学・三年一組の教室（昼）

洸平 「パワーアップしてね？」

想の弁当、鮭の西京焼きと炊き込みご飯。

想 「西京焼きは切り身買ってきてトースターでチンするだけ。

炊き込みご飯も具材混ぜて炊くだけ」

洸平 「あ、そなの？」

想 「手抜かなきゃ毎日やってらんないよ」

洸平、一口炊き込みご飯を食べる。

洸平 「でも美味いわ」

想 「マズく作る方がムズいよ。レシピ通りやるだけなのに」

と、担任・福田壮平（39）、通りがかりに想の弁

当を覗いて、

福田 「いいなあ。弁当作ってもらえて」

洸平 「先生、想ちゃん自分で作ってんすよ。しかも毎日」

福田 「え？」

洸平 「お母さんの分まで、最近は夜ご飯も。な？」

想 「はい。今月からすけど」

福田 「……生原、お前それ本当か？」

9. 丸バツ中学・進路指導室（夕）

福田 「もちろん、言いたくないことは無理に言わなくていい。

生原の家が母子家庭で大変なのは分かってる」

と、真剣な表情。

想、戸惑っていて、

想 「それはまあ、そう、なんですけど」

福田 「先生が子供の頃は家事や掃除なんて手伝って当たり前だった。でもな、ヤングケアラ―って知ってるか？」

想 「聞いたことは」

福田 「大人になってから後悔して欲しくないんだ。もし先生に何かできることがあったら、教えて欲しい」

と、じっと想を見つめる。

想、吹っ切れて、

想 「……あの、マズすぎるんです」

福田、呆気にとられて、

福田 「ん？」

想 「マズすぎるんです。母の料理が」

福田 「マズ、すぎる？」

想 「情熱だけはあるんです。昔ホテルの朝食で生ハムメロンが出て、子供の僕はそれを美味しいと言ってしまった」

想、溢れる想いが止まらない。福田、置き去り。

福田 「ん、えっと、生原？」

想 「だから何かと果物を使うんです。納豆とパイナップルの冷製パスタ、サクランボと鰻のシチュー、キウイの肉巻き、これを三大得意料理だと言ってます」

福田 「それはまた、独創的な」

想 「基礎のない人間に創作は無理です」

福田 「お仕事で、疲れてらっしゃるのかな？」

想 「流石に疲れすぎでしょ」

福田 「……それで、代わりに？」

想、諦めたように頷く。

想 「先月の校外学習二日目の朝食、覚えてますか？」

福田 「えっと……」

想 「筑前煮とほうれん草の磯辺和え」

福田 「ああ、そうだった？」

想 「なんの変哲もない和食と思ったでしょ？ 僕は感動しました。でも皆、安いビジネスホテルの味とか言って、これを美味しいと思ってんの僕だけなんだったっていうか。僕っ

て舌もバカになっていくんだって、惨めで。でも、これなら自分で作れるかもって思ったんです」

福田、言葉が見つからず、

福田 「だからって無理して毎日作らなくても」

想 「毎日食わされる身にもなってくださいよ」

福田 「受験生だし味くらい我慢というか、この一年はお母さんに任せた方が」

想 「受験生だからです。下痢が止まらないと思ったらお刺身安かったって買ってきた魚が煮物用でした」

福田 「……それは、言ったのか？」

想 「言えるわけじゃないですか」

福田 「え？」

想 「だって忙しい中毎日僕のために作ってくれてるのに、そんなこと、言えるわけじゃないでしょ」

想、思い出したように時計を見て、ハッとすする。

想 「失礼します」

福田 「生原？」

想、外へ駆け出る。

想 「時間がないんです。そろそろ帰らないと母さんまた……」

10. 想の自宅マンション・リビングキッチン（夜）

京子、鼻歌を歌い、トントンとバナナを輪切りに。

コンロではおでんがグツグツと煮えている。

想、キッチンに駆け込むも、状況を理解。

京子 「おかえり」

想 「……ただいま」

京子 「もうすぐできるから、座ってて」

想 「うん、ありがとう」

と、一瞬あって、屈託のない笑顔。

（おわり）